

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第14回

土肥いつき DOHI ITSUKI

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

交流会の扉の向こうの世界

前号(4月号)には、わたしがかわる京都・在日外国人生徒交流会とトランスジェンダー生徒交流会のはじまりについて書きました。ふたつの交流会のプログラムはともに「昼ごはんをつくる」、「昼ごはんを食べる」、「自己紹介や近況報告をする」です。このようなプログラムにしたのは、やはりキャンプの経験によるところが大きいと思います。以下の「交流会」はトランスジェンダー生徒交流会のことです。

交流会の会場は、参加者の安全を守るために公開していません。また会場はわかりにくいところにあるので、初参加の人は最寄り駅に集合しています。したがって、初参加の人は、どこに行くのかわからないまま、とにかく会場まで連れて行かれることとなります。会場に到着したら、まずは名札を付けます。名札には「呼ばれたい名前」を書いてもらいます。続いて、包丁を渡されて、昼ごはんづくりがはじまります。

通常、このような会は、自己紹介からはじまるのではないのでしょうか。ただ、わたしがかわっている交流会は、自己紹介こそがメインのプログラムです。自己紹介で深い話ができるようにしようと思ったら、そこまでいっぱい一緒に遊ぶ必要があるのではないかと考えています。ただ、一緒に遊べるようになるためには、その前に一緒にワークをした経験が必要なのではないかと考えています。プログラムの最初に配置した「昼ごはんづくり」は、いわばアイスブレイキングとしてのワークの役割を意図しています。

昼ごはんのメニューはさまざまです。たとえば手打ちうどんをつくったことがあります。小さい参加者がうどん玉の上で飛び跳ねているのを、みんなニコニコしながら眺めていました。興奮しすぎて全身粉だらけになる子もいて、思わず上からさらに小麦粉をかけてあげました。そんなふうにしてみんなで作った昼ごはんを、みんなが思い思いの場所で、食べたい人と一緒に食べます。食後、小学生は近所の公園や会場の前の道でドッチボールをしたり鬼ごっこをしたり、思いっきり遊びます。中高生も思い思いにのんびりした時

間を過ごします。輪から外れている参加者がいれば、必要に応じて大人の参加者にサポートに行ってもらいます。わたしの役割は「交流会の中心にいること」ではなく、参加者と参加者をつなぐことだと思っています。このようなわたしのスタンスは、キャンプで経験した「適度な介入と適度な放任」や、担任時代に経験した「生徒と生徒をつなぐこと」から学んだものです。

あるトランスガールの小学生の保護者の方が、交流会との出会いを次のように書いてくださいました。

小さな子どもたちの成長はとても早くて目まぐるしいものですが、そこに心配事や不安が加わると時間の流れも変わり、グルグル彷徨う迷路のようです。私たち親子がトランスジェンダー生徒交流会に辿り着けた道程は、まさにどこかに通じている大道ではなかったなあと思い返します。

トランスジェンダー生徒交流会につながれたことで、子どもが今を自分らしく生きることに迷いはなくなりました。ですが、そのつながりの道しるべはわかりやすい標識ではありませんでした。子どもたちのプライバシーを守るためにもトランスジェンダー生徒交流会の扉は大切に守られています。その場所はさまざまなアライによって用意されていました。迷い迷って辿り着いてもいるので、本当にここかな…入っても大丈夫かな…そんな気持ちで生徒交流会の扉を開いたのを覚えています。ドキドキしながら入ってみると、何と云うか、思ったんと違う集まりでした。難しいお話も、細かな紹介もなく、とにかくまずは自分とみんなが食べるご飯をつくるんです。そして一緒に食べて、おしゃべりしたり、ゆっくりしたり、各々があるがままで過ごします。守ることは、自分らしさと、そこに集まっているそれぞれを大切に、アライが用意してくれた私たちだけの物ではない場所を大切することかなあと、私は思っています。

次号には、このように過ごしたあとの自己紹介や、夏のキャンプや冬の合宿について書こうと思います。